

戦時中、長野県に疎開した白土三平の中学時代を追って、筆者は上田市真田町(旧・長村)を訪ねた。そこは徳川家康に抵抗した戦国武将・真田昌幸、幸村親子の伝説が残る奥深い山村であった。

長野新幹線・上田駅の駅前からバスに乗った。

バスは、盆地に開けた市街を抜け国道144号線を東北に向かう。市街より一段高い台地に上信越自動車道が横たわっている。上田菅平インターチェンジの

日本が戦争に敗れた昭和二十年

白土三平は生きることの原点を信州で学んだ

あつた傍陽線・横尾駅のそばに住んでいた。

「たしかに山が近い」

歩きながら、そうつぶやいてみる。白土さんから、長村の山々を駆け回った思い出を何度か聞いていたからだ。

「私は中学の低年生であった。私の住んでいた村は二本の川に挟まれるような地形にあり、その間の丘陵地帯に段々畑が広がり、農家が点在する、いわゆる山村であった。」
 「カジカ」『白土三平の好奇心』カムイの食卓』小学館刊」

昭和19年の暮、それまで上田盆地平野部

の小県郡中塩田村(現・上田市八木沢)の蚕室で暮らしていた岡本一家は長村(現・上田市真田町)に借家を

みつめて引っ越ししている。母・君子は身重だったから、父・唐貫は出産のために広い家を準備したのである。

長村の借家で岡本唐貫・君子の長女・彌子(あきこ)が生まれたのは昭和20年2月のことだ。登少年より13歳年下で、三人の兄弟の下に生まれた初めての女の子である。後に唐貫は、三人の兄弟が小さな妹を抱いている姿を絵に仕上げていた。周囲を山に囲まれた軒家の、雪の積もった庭先で、弾むように遊ぶ息子たちと赤ん坊を、縁側に座った両親が見守っている。

静けさと平穏が観る者に伝わってくる暖かい絵だ。日本という国が敗戦に向かつて刻一刻と減っていくなか、プロレタリア美術運動の闘士によく訪れた、つかの間の平和がそこにあった。



この冬、長男・登は中学二年生、次男・鉄二は小学校五年生だ。新しい命を含めた二家七人が山深い信州の冬を越して生き延びるためには、この二人の男手に頼らなければ立ち行かない。警察の拷問から脊椎カリエスを発症したことのある父唐貴には力仕事ができなかったからである。

登少年は多忙であった。旧制上田中学では軍事訓練と勤労動員に明け暮れ、家に帰れば二家を支えるためにさまざまな山仕事や力仕事が続いている。

《当時の父親の経済力では、私や弟たちの食欲な胃袋を満たせるはずもなく、ましてや山村生活それ自体が厳しいものであつてみれば当然であつた。とくに、

父が買ってくれたキノコ図鑑が

山村の活動圏を大きく広げた

雪におおわれた厳冬を乗り切る食料、燃料を確保する

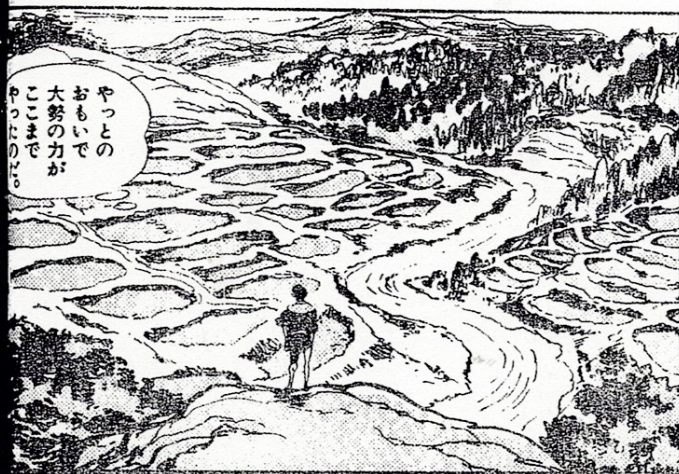
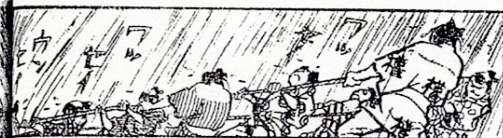
ための労力は並大抵のものではなかった》(「スス飯」

『白土三平の好奇心』カムイの食卓』小学館刊)

山で薪を拾い、キノコをみつける。それが遊びでもあり、家族を助ける仕事でもあった。この頃、戦闘機を飛ばすための燃料の松根油になるとして軍が各家庭に、松の根を掘って供出を求めたという嘘のような話があるが、枯れた松の根を掘り起こして運ぶ作業も二人の兄弟の役目だった。

次の思い出は登少年が中学二年生になる冬から春にかけてのことらしい。勤労動員の生徒たちを使って河川敷の新田開発が企てられた。まさに「カムイ伝」

の世界である。国の仕事なので農家を手伝う時のよ



河川敷の新田開発が企てられた。まさに「カムイ伝」

の世界である。国の仕事なので農家を手伝う時のような炊き出しもないまま仕事を進めたが、ひと冬かけた土木作業が完成して水を入れてみると、蟬音とともに新田の一部に渦巻きが起こつて田の底が抜けてしまったという。

そうした勤勞奉仕のかたわら、仕事前や昼休みになるとカジカ(ハゼのような川魚)を水生昆虫を餌につけた草の茎で釣り上げ、友人たちとともに即席で作った炭竈にあぶって白焼きをつくる。カジカの白焼きで空腹をおぎない、残りを家族のみやげにするという暮らしぶりなのである。

長村は狩猟採集文化が色濃く残っている土地でキノコ採りが盛んであった。秋になると村人が山に入り、ベニテングダケのような毒キノコでさえ保存して食料とするのである。岡本家の兄弟は村人にならつて山に入り、キノコの識別や保存方法を学んでいた。



登少年にはSという友人ができた。同じ横尾地区に住むよろず屋の息子である。登は父・唐貴が手に入れたきた小さなキノコ図鑑を持っていて、二人はその図鑑を見ながら山でさまざまなキノコを採取・研究をした。二人は親友となり、登のキノコに対する愛着はその後にも継続していく。白土三平の漫画家デビュー二作目にあたる『甲賀武芸帳』(昭和32〜33年)には早くもキノコのモチーフが使われており、以後、さまざまな作品でキノコが登場するのである。

中塩田村そして長村での生活は作家・白土三平の世界観をささえる大きな体験となった。戦時体制のなかで生きる苦労は国民が等しく受けたものとしても、登少年はこの土地で、

村落社会に生きる人間関係の機微を悟り、農業と自然に依拠した古い生き方を体感した。それと同時に、登少年は自然のなかで飢えを切り抜けながら大人になるという通過儀礼を、嬉々としてやり遂げたように見える。

登少年は幸運であった。彼が山河を歩いて飢えを切り抜けようとしていた昭和20年、幼年期を過ごした大阪の小曾根村は激しい空襲にあつて多くの人が命を失った。小学生時代を過ごした東京・練馬も焼け野が原になつていく。父・唐貴は時代を見通す才覚によつて、家族を守つたのだった。(つづく)

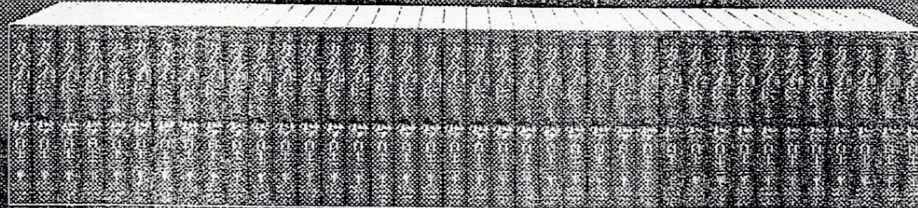
写真・構成・文／毛利甚八
写真／和田悟(白土氏ポートレート)

白土三平 西暦50年記念出版 決定版 カムイ伝全集 全38巻

[カムイ伝 第一部]15巻 [カムイ伝 第二部]12巻 [カムイ外伝]11巻

四六判並装／平均約400頁 定価(各)1,260円(税込) 全38巻揃い定価47,880円(税込) 第一部15巻揃い定価18,900円(税込)

[外伝] 第1〜7巻 絶賛発売中 ●毎月2点ずつ刊行 3月末完結予定
[第一部]第1〜15巻 [第二部]第1〜12巻 絶賛発売中



「カムイ伝全集」をより深く理解し、楽しむためのオフィシャル・サイトが大人気稼動中です。 www.shogakukan.co.jp/kamui/